日本人女性初！「ドクトル・メディツィーネ」

宇良田唯女史と牛深歴史散策マップ

Dr. Tada Urata
(1873-1936)

一般社団法人 天草宝島観光協会　牛深支部

年　譜

明治6年	1歳	5月3日 天草郡牛深村船津に誕生
13年	7歳	潮東小学校（牛深小学校の前身）入学
	18歳	同郷の富豪「塩屋」の若主人との縁談があったが勉学の道へ
25年	19歳	熊本薬学校（後の熊本大学薬学部）卒業・薬剤師となる
29年	23歳	東京の私立医学校　済生学舎入学
31年	25歳	医術開業試験に合格し、医者となる
		私立伝染病研究所（後の北里研究所）にて、北里柴三郎に師事
		浜田玄達（日本の産婦人科学界の始祖）にも師事
32年	26歳	医籍登録　後に約2年近く牛深で開業
35年		「帝国独逸学会特別会員」となる
36年	29歳	1月10日ドイツ留学のため横浜から出発
		6月1日父玄彰逝去（享年63）・翌年日露戦争勃発
38年	31歳	ドイツのマールブルク大学で
		医学博士学位「ドクトル・メディツィーネ」授与
		論文「いわゆるクレーデ点眼液の効果に関する実験的研究」
		帰国後、牛深にて開業
		東京神田連雀町（れんじゃくちょう）にて「宇良田眼科医院」を開業
40年	33歳	島原出身の北里研究所薬剤師　中村常三郎と結婚。
		夫と中国大陸に渡り、天津に総合病院「同仁病院」開業
昭和7年	59歳	夫 常三郎逝去
8年	60歳	帰国して牛深の生家近くにて眼科・産婦人科医院を開く
9年	61歳	再度上京し池上洗足町にて「中村眼科医院」を開業
11年	63歳	6月18日 肝臓ガンのため東京にて永眠・享年63歳
		分骨は牛深小学校近くの山頂に父玄彰とともに眠る

宇良田唯（うらた ただ）の生涯　DOCTOR MEDICINE

宇良田唯は、日本人女性として初めてドイツで医学博士の学位「ドクトル・メディツィーネ」を授与された牛深出身の医師です。
唯は現在の熊本県天草市牛深町船津に7代目大銀主の父宇良田玄彰・母キシの二女として誕生しました。
年頃になったタダは、同郷の富豪である「塩屋」の若主人との縁談がありましたが、「私はよそに出て、勉強がしたい」と出奔し、勉学に励みました。
唯は熊本市内の吉田毒消丸本舗に下宿をしながら、私立熊本薬学校（現在の熊本大学薬学部）で学び、まずは薬剤師になります。薬剤師となった唯は、父と新町に薬局を開きますが、医師を目指すため2年もたたずに店を閉めてしまいます。
その後、東京の済生学舎医学校に入学し、通常3年かかるところを猛勉強した末、1年半で学問を修め、医師になりました。学生時代、唯は布団を縦半分に折り、そこで寝ていたそうです。当然、寝返りを打てば畳に転がって目が覚め、転がり起きては勉学に励んだといいます。
医師となった唯は、私立伝染病研究所（後の北里研究所）にて、北里柴三郎、浜田玄達に師事。（同校出身の野口英世も北里柴三郎に師事。）その後、牛深で2年ほど開業しますが、ドイツ留学のため再び上京しました。
唯が留学を目指したきっかけは、牛深に多かった眼病の存在が大きかったといいます。
そして、ドイツのマールブルク大学に留学し、在学時に眼科論文「いわゆるクレーデ点眼液の効果に関する実験的研究」で医学博士学位「ドクトル・メディツィーネ」を授与されました。
帰国後、牛深にて開業しました。帰国の際に牛深の人たちは唯を船団で出迎えました。
その後、東京の学習院女子部からの熱烈なオファーがあり上京し、神田連雀町（れんじゃくちょう）にて「宇良田眼科医院」を営む傍ら、教師として働きました。帰国から5年後、北里夫妻の媒酌により、中村常三郎（島原出身の北里研究所薬剤師）と結婚。
恩師である北里柴三郎先生の助言をうけて夫婦で中国の天津に向かい、総合病院「同仁病院」を創設し、25年間営む。鉄筋コンクリート、3階建て、入院部屋15室の病院で、1階では夫の常三郎が薬局と印刷所を経営していました。眼科・産婦人科・内科・小児科も診察し、英語とドイツ語、新たに学んだ中国語を使って診療にあたりました。病院での患者に対しては、国籍や貧富の差に関係なく平等に接し、往診料を払えなかった患者さんには布団の下にそっとお金を置く事もあったと言われています。そのため、中村夫妻は極めて質素な生活を送ったそうです。
夫である常三郎が病死した翌年、中国から帰国し、牛深で眼科・産婦人科医院を開きますが、再度上京し池上洗足町にて「中村眼科医院」を開業。東京にて永眠・享年63歳。
生涯を医療に捧げた人物です。
（※戸籍名は「タゝ」ですが、本人は、好んで「唯」を使用していたといわれています）

お許しくださいませ
「私はよそに出て、もっと勉強したいのです」
富豪との縁談より勉学を
（※出奔には諸説あります。）

猛スピードで医師へ
学生時代、布団を縦半分に折り、そこで寝て、転がり起きては猛勉強
通常３年を１年半で習得

単身ドイツ留学
ドイツのマールブルク大学留学時、日本女性初、ドクトル・メディツィーネ授与！（医学博士学位）
留学のきっかけは故郷牛深に多かった眼病の研究

女性版、赤ひげ先生!?
北里柴三郎の勧めで中国・天津にて「同仁病院」創立。往診料を払えなかった人には布団の下にそっとお金を置く事も

中国・天津で「同仁病院」創設
（出典：宇良田 心）

東京「中村眼科医院」前
（出典：宇良田 心）

ハイヤ節発祥地の碑
牛深ハイヤ節は、南風待ちの上り船と北風待ちの下り船、時化待ちの船乗りと廻船問屋の主人、牛深の芸妓たちが育んだ伝統芸能で天草市の無形民俗文化財。全国各地に伝えられたハイヤ節系民謡の源流を証する碑。

新銀取り坂
「新銀取り」とは江戸時代に大阪などで稼いできた新銀（享保銀）をもった船乗りたちを「現地妻」として迎えた牛深の女性たちのこと。女性たちが弁財船の男たちを出迎えるために行き来した坂を「新銀取り坂」と呼んでいる。

遠見御番所之碑
牛深では３つの番所が置かれ、御用船がいた。往来船の見張りや難破船の救助、密輸や抜け荷の取り締まり等に当たった。

大嶋屋娘ヨヰの墓碑
幕末・維新期の政治家で薩摩藩士だった『大久保利通』の〝好き人〟ヨヰの墓。

せどわ集落
加世浦・真浦の密集家屋地区で漁師たちが多く住む。鯵川・鰤口・鯖江など魚にまつわる苗字の人も多い。

坂本龍馬

父：宇良田玄彰
自由民権の活動家

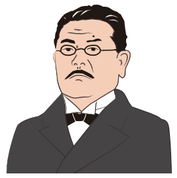
大久保利通

建白

西郷隆盛

玄彰：
唯に多大な影響を与えた父、宇良田玄彰は、大銀主「萬屋」の7代目であり、自由民権の活動家。20歳で京都へ登り、仁和寺の書生となった後に、長崎で坂本龍馬に学ぶ。薩摩藩士西郷隆盛や大久保利通らと親交のあつた玄彰は、明治10年西南戦争が勃発すると、西郷隆盛と明治政府内外の各要人に建白（意見）書を提出し、戦争の終結に努めた。明治11年に東京で『憂国議事新聞』を発行し国民世論の政治的向上に尽力する。

宇良田　唯
（出典：宇良田 心）



恩師：北里柴三郎

官立伝染病研究所の同僚と
（出典：宇良田 心）

唯と夫中村常三郎
（出典：吉川 茂文）

野口英世

帝国ドイツ学会特別会員証
（出典：宇良田 心）

資料提供：
表紙写真（出典：吉川茂文）
宇良田　唯に関する資料一式（片白健次）
宇良田　唯に関する資料一式（宇良田 心）
宇良田　唯（吉川茂文　著）
宇良田タダ女史顕彰碑建立援助・貢献：
（福本病院 Dr. 福本郁子）

宇良田タダ女史顕彰碑
台座は唯をイメージした袴のシルエット

生家跡に残る「萬屋（よろずや）」の蔵

宇良田玄彰の顕彰碑
玄彰は西郷隆盛に西南戦争をいさめる建白をしたり、大久保利通など薩摩藩士と知交があったとされる人物。